

Sakai Hiroshi

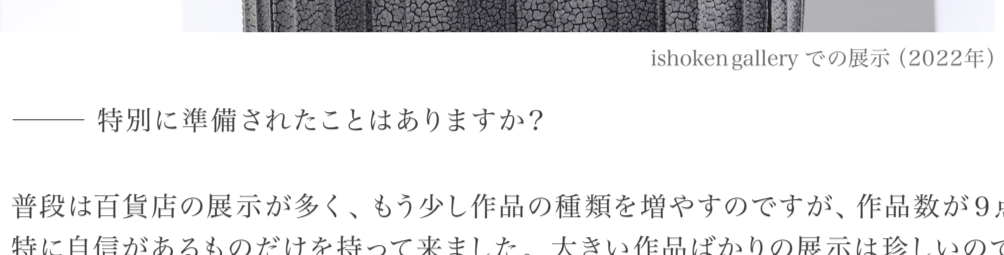
酒井 博司



2022年に ishoken gallery で展覧会を開催した第26期卒業生の酒井博司さんに、お話を聞きました。

—— ishoken gallery での展示も残りわずかですが、いかがだったでしょうか？

すごく満足しています。
 できるだけ良い作品を並べたくて、人手に渡さず長年保管していたものや、新しく焼いた中でも出来の良いものを持ってきてきたのですが、不慣れな白い展示空間に少し不安もありました。ただ、作品を並べてみたら、作品が映えて想定よりも良い雰囲気です。周りから聞こえてくる評判にも満足しています。



ishoken gallery での展示 (2022年)

—— 特別に準備されたことはありますか？

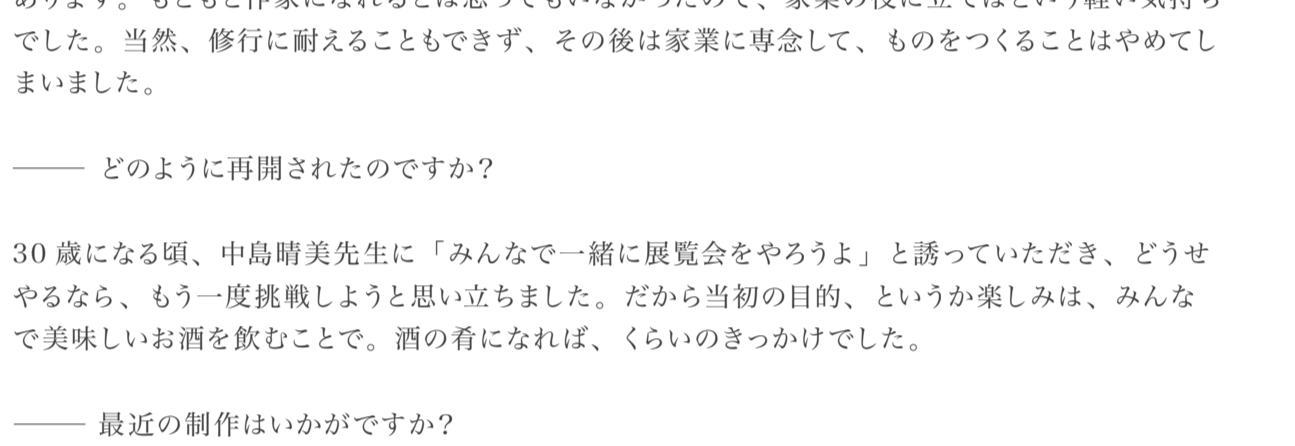
普段は百貨店の展示が多く、もう少し作品の種類を増やすのですが、作品数が9点と少な目なので、特に自信があるものだけを持って来ました。大きい作品ばかりの展示は珍しいので、とにかく気合いを入れて準備しました。

—— 展示や公開特別講義、特別実習を通して特に伝えたいことはありますか？

私の作品は「志野」ですが、一般的にイメージされる桃山の「志野」とは大きく違います。私自身が「志野」の何に魅力を感じて制作しているかを感じてもらえたら嬉しいです。

—— 「志野」に魅了されたきっかけはどのようなものでしたか？

加藤孝造先生の作品です。
 大学4年生の夏休みに松坂屋の個展を見に行きました。作品を目の前にして、こんなものを作れたら、家業にも役立つし、箔もつくし、と少し下心を感じつつ、でも、自分の手からこんな作品が生み出せたらどんなに幸せだろうかと、感動していました。
 当時は、家業の為にどこかへ修行に行きたいと思い、知り合いを頼っての弟子入りを考えていました。今思うと、本当の意味で「修行」をやりたいというよりは、人生経験として「修業先」を選んだのかもしれない。ただ、あの時の感動が忘れられず、私の中にずっと孝造先生の「志野」がありました。それが今に繋がっています。



研究生に授業する酒井さん

—— では、孝造先生の作品との出会いから40年経っているんですね。

そうですね。22歳の夏に見て、今62歳なので、もうすぐ40年になります。

—— 40年、ひとつのやきものに熱中できているすごいですよね。

ずっと熱中していたわけではありません。修行に行って、嫌になり、私にはできないと諦めたこともあります。もともと作家になれるとは思っていませんでした。家業の役に立たないという軽い気持ちでした。当然、修行に耐えることもできず、その後は家業に専念して、ものをつくることはやめてしまいました。

—— どのように再開されたのですか？

30歳になる頃、中島晴美先生に「みなんで一緒に展覧会をやらうよ」と誘っていただき、どうせやるなら、もう一度挑戦しようと思えました。だから当初の目的、というか楽しみは、みんなが美味しいお酒を飲むことです。酒の肴になれば、かなりのきっかけでした。

—— 最近の制作はいかがですか？

62歳になり、本当に色々吹切れた感じがします。振り返ってみて、色々なことを「まあいいかな」と許せるようになり、もうやりたいようにやればいいのかと素直に思えました。評価されたいとか、売れたいとか、チヤホヤされたいとか、そういうことを気にしなくなりました。また何かのきっかけでそう思うかもしれませんが、ここ1、2年は、あまり動揺せず、集中して制作することができています。

—— 日々の制作で心掛けていることはありますか？

始めた頃から「つくるぞ！」っていう気持ちを抑えながら、淡々とつくり、気負わず取り組むことを心掛けています。私自身、飽きてしまうとダメなタイプなので、とにかく飽きないように。気合いを入れすぎると疲れてしまうので、そうならないように注意して。だから40年も続けられたと思います。もともと、技術が上っていくことに楽しみを見出すタイプなので、特に轆轤に関しては、昨日より今日、今日より明日と、集中して取り組んで来ました。

—— 轆轤への強いこだわりを感じます。

そうですね。轆轤は集中しないとダメで、集中した方が心地良いです。結果がどうであれ、集中していないと達成感がないです。でも最近は年齢のせいかな中々体がつきません。集中して、息を止めて、と作ることが轆轤の醍醐味です。息を止めている間に形を作る技術を、私は他に知りません。辛いので、やる前はやりたくないと思うのですが、嫌だなと思いながら、土を轆轤に置いて…、やり始めるという間に夢中になっています。

—— 酒井さんの作品には、梅花皮（かいらぎ）にも強いこだわりを感じるのですが、どのように取り組まれてきましたか？

轆轤は技術で、梅花皮は知識です。一般的には技術と言われるかもしれませんが、私の場合は釉薬や焼成に対する知識から、あの梅花皮が生まれてきます。なので、たくさん試験をしました。

—— 多くの時間を費やされてきたんですね。

そうですね、梅花皮は長い間出ませんでしたから。そうやって出したから、とにかく窯を焚きたくて。窯を焚くには、素地が必要で。まかり間違えて突然、綺麗に焼けた時にテストピースじゃ悲しすぎるので、しっかりと轆轤で立ち上げて。梅花皮が綺麗に出るのを夢見ながら、何度もあげました。

—— 今、40年間を振り返られて印象的に思うことはありますか？

やっぱり、自分に自信がない時は揺れていました。やっていることに自信がないと、評価が欲しい、売れたいという気持ちが強くなる。それは「私に自信をちょうだい」という気持ちの裏返しだったかなと。だから、2002年に国際陶磁器展美濃で銀賞をもらった時は、周りの声の聞こえ方まで変わった気がします。今でも動揺したりしますが、あの時は振り幅が全然違います。当時は中島先生や家内に「やめるなよ」とか「やめたら」って言われるくらい心配されて。それでも、周りの支えだったり、励ましだったりがあったってなんとか続けて来られました。今振り返ると、続けてきてよかったな、楽しかったなと思います。

—— 意匠研で出会った仲間とは、卒業後も親交が続いたんですね。

気持ちをわかってくれる人は彼らだけでしたから。最初はどこへ行っても、相手にされないし、冷たい目で見られたりして、応援してくれる人は意匠研の仲間しかいなかったように思います。今はそんなことないですけど、本当に一番苦しかった時は、家内と意匠研の仲間くらいでしたよ。

—— 一番苦しかった頃は…。

始めて10年くらいが一番厳しかったです。焼いても、焼いても梅花皮が出ず、偶然上手くいっても、「あんなの」って言われたりしました。

—— それでも挑戦され続けて来られたのですか。

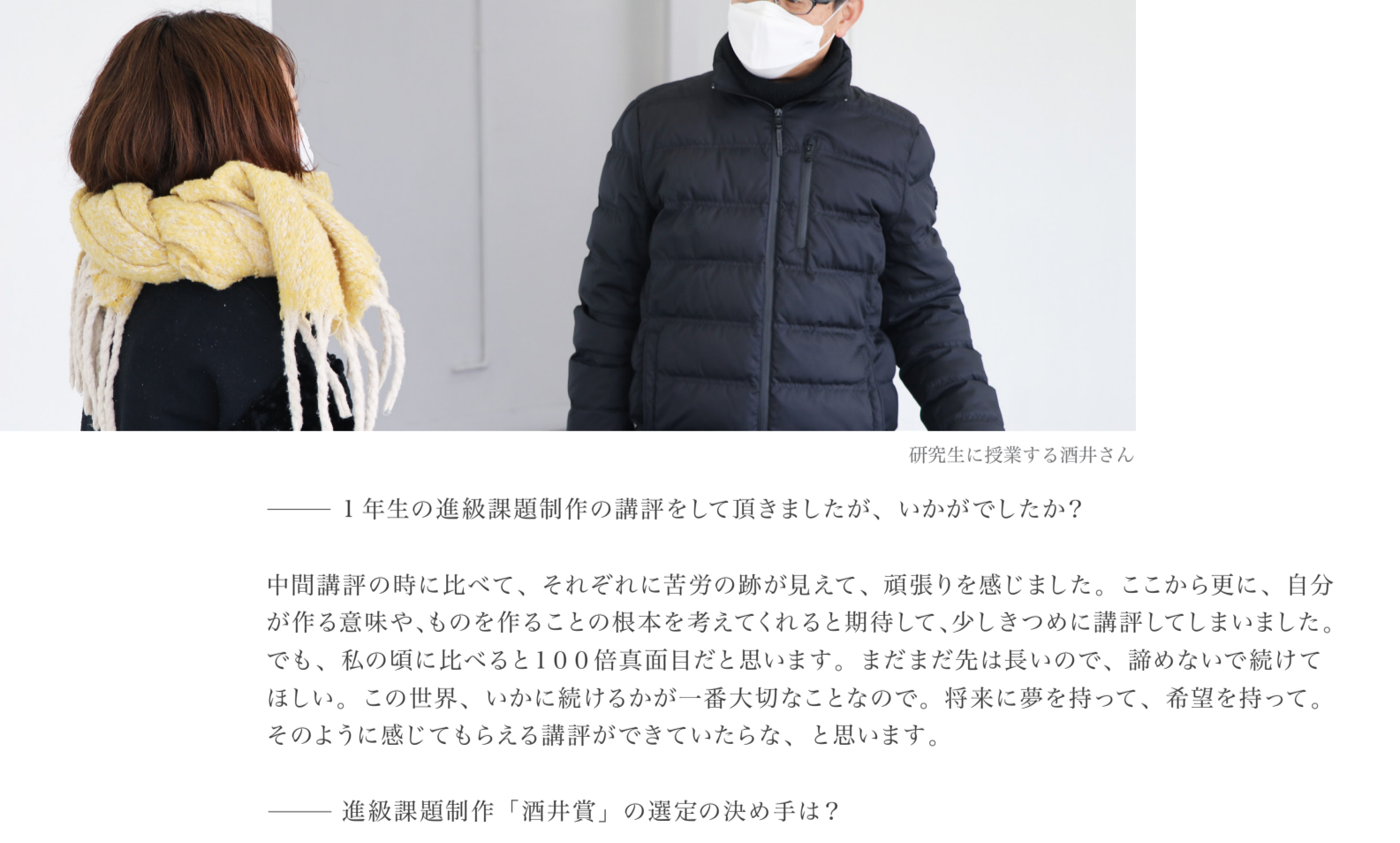
そうですね。始めた頃は色々な公募展にも出ていました。ただ様々なことを経験していく中で、伝統工芸展の趣旨が私にあるなど考えるようになりました。最初は傾向と対策みたいなこともしましたが、思うようにいかないことも多く、勉強していく中で、伝統工芸展の高いハードルを何とかして超えたい、という思いが強くなっていきました。「普通、9回も連続して落ちたら諦めるぞ」なんて言われたこともあります。

—— 9回連続ですか…。

「志野では入れない」と言われたこともあります。先輩作家が気を使って教えてくれたのですが、逆に意地になっていました。自分がやりたいことでなくては、意味がないと。そして、やればやるほど私の「志野」に対する想いも強くなっていきました。

—— 目標としている作品や制作の指標はありますか？

ありません。始めた頃、青い色に変えるまでは、孝造先生の作品が目標でした。コピーを作れば自分は満足できたと思います。ただ色を変えてから、どうしていいかわからなくなりました。目標やお手本になるような作品は存在しなかったのです。それ以来、日々の制作の中の発見を大切に出来ました。繰り返しの途中で、「あ！」と思うものを次の作品に活かして、焼けたものを見て次はこうしたい、このラインをこう変えたいという発見を次の作品に表現する。淡々と作る中で少しずつ変化して来ました。



研究生に授業する酒井さん

—— 1年生の進級課題制作の講評をして頂きましたが、いかがでしたか？

中間講評の時に比べて、それぞれに苦勞の跡が見えて、頑張りを感じました。ここから更に、自分が作る意味や、ものを作ることの根本を考えてくれると期待して、少しきつめに講評してしまいました。でも、私の頃に比べると100倍真面目だと思います。まだまだ先は長いので、諦めないで続けてほしい。この世界、いかに続けるかが一番大切なことなので。将来に夢を持って、希望を持って。そのように感じてもらえる講評ができていたら、と思います。

—— 進級課題制作「酒井賞」の選定の決め手は？

迷いました。「めし碗」という課題に対して、研究生がどのように考え、どのように個性を表現しているかが課題の出来栄で、そこを評価しようと思っていたのですが…。最終的には私の好みもあつた気がします。でも、よくできていると思つたし、釉薬も工夫されていて、とても興味されたラインをしていました。なので、彼女の作品を選びました。

—— 最後にやきものを志す後輩たちにメッセージをお願いします。

長く続けましょう！
 やきものにこだわって、続けてもらえるのが一番いいかな。きつと順風満帆だけではいけないけれど、長く続けて、「これが自分の作品です」と、胸を張れる作品が一つでもできるように頑張ってください。そうなれるように、私も頑張ります。



藍色志野壺 (2019年)



酒井 博司

1960年、岐阜県土岐市生まれ。
 1983年、名古屋工業大学卒業。1985年に多治見市陶磁器意匠研究所を修了し、加藤孝造氏に師事。
 現在は日本工芸会正会員、日本陶芸美術協会常任幹事を務める。
 伝統のある美濃のやきもの「志野」の技法を使いながらも、作家自身の感性に由来する現代の「志野」を制作する。
 その作品は国内外で高く評価され、外務省国際交流基金やWorld Ceramic Exposition Foundation、フアエンツァ国立陶芸博物館、台北県立鶯歌陶磁博物館、岐阜県現代陶芸美術館などで多数収蔵されている。
 主な受賞歴に、国際陶磁器展美濃 陶芸部門 銀賞、陶芸展 日本陶芸美術協会賞（最高賞）など。